白梅学園大学・短期大学紀要　**42**：29～46（2006）

恋愛の原因帰属と言葉による自己呈示の実証的研究

――性格，外見，対応，運への帰属傾向について――

荻野　七重[*1]・齊藤　　勇[*2]・小嶋　正敏[*3]

荻野・齊藤（2004）は入試について，齊藤・荻野・小嶋（2005）は恋愛について，日本人の原因帰属を成功と失敗，内心と発言に分け，帰属傾向の実証的研究を行っている。齊藤他（2005）はさらに，これらの調査結果を踏まえて，入試と恋愛という課題の違いがどのような異なる帰属傾向を持つかを検討している。その結果，入試では努力，恋愛では性格の要因への帰属が高いことが示された。帰属要因の努力と性格は，Weiner（1980）の分類によればどちらも内的要因である。しかし努力は内的要因でも変動要因であり，性格は固定要因である。したがって，入試は変動要因の努力要因への帰属が高く，恋愛は固定要因の性格要因への帰属傾向が高いということができる。北山・高木・松本（1995）は，日本人特有の努力要因の重視傾向を指摘しているが，齊藤他（2005）は恋愛課題においてはこの傾向はみられなかったことを明らかにした。

そこで，本研究の目的を明確にするために，まず，恋愛における身体的魅力の影響について従来の研究を概観することにする。恋愛は出会いから始まるが，対人場面で未知の他者と会った場合，人は相手のどのような点に注目し，相手を知ろうとするであろうか。このことについてBeach & Weltheimer（1962）は初期の対人認知の内容を検討しているが，その第一に身体的認知をあげ，相手の顔やスタイル，体型などに注目して相手を知ろうとする，としている。このように外見や容姿は，対人認知の第一歩であり，それが第一印象を形成するのに大きな影響を与えるといえる。このことは特に恋愛関係において重視されるといえよう。Murstein（1972）は，男女の出会いから恋愛，結婚に至るまでのプロセスを研究し，親密化には3つの段階があるとして独自のSVR理論を提唱している。SVR理論の3段階とは，第1段階の刺激ステージ（stimulus stage），第2段階の価値ステージ（value stage），第3段階の役割ステージ（role stage）である。第1段階の刺激ステージとは，出会いの瞬間であるが，刺激とは，主に外見や容姿のことで，はじめて会ったときは，刺激が二人の関係を発展させるかどうかを決める最も重要な要因であるとしている。この場合の刺激とは顔，スタイル，服装，表情，しぐさなど身体的，行動的特徴などであ

[*1] 短期大学心理学科，[*2] 立正大学，[*3] 玉川大学
Nanae OGINO, Isamu SAITO, Masatoshi KOJIMA : Self-Presentation and Causal Attribution of Romantic Love ― Attribution to Character, Looks, Reaction and Luck

る。本研究ではこの第1段階の刺激ステージに注目する。この第1段階の刺激ステージでは外見が重視されることは，当然，本人も意識していると思われるので，恋愛の成功・失敗の原因帰属を考えたとき，外見や容姿に重点をおいて帰属するのではないかと考えられるのである。ちなみに，SVR理論においては，第2段階になると，価値観の類似性が最も重要な要因となるとしている。同じ趣味，同じスポーツの好み，社会的意見の一致，特に生活に対する態度が共通しているかどうかが問題となる。性格が成否の帰属原因となるのはこの段階からといえよう。Murstein（1972）は，価値観が類似していてこの第2段階が充足されると第3段階となり，2人の役割関係が重要な要因となり，相補的な関係により関係や生活がスムーズに進む。2人の間で生じる問題について役割関係が互いに満足されると，真に親密な関係が結べるとしている。

さて，従前の研究によれば，恋人に望む要件として身体的魅力を重視するのは，男性と女性を比べると男性の方であるという研究結果が多い。たとえば，恋人を求める求人募集の広告欄の内容を分析した研究（Cicerello & Sheehan, 1995 ; Koestner & Wheeler, 1988 ; Rajecki ; Bledsoe & Rasmussen, 1991）によると，女性は地位が高く，収入が多く，学歴が高い男性を求めるのに対して，男性は若くて美しい女性を求めており，逆に，自己宣伝としては，男性は地位や収入を掲示し，女性は若さや美しさを掲示していることが明らかにされた。また，Fletcher, Tither, O'Loughlin, Friesen & Overall（2003）は，女性は，ハンサムだが冷たい男性よりもハンサムではないが暖かい男性の方を好むことを明らかにしている。さらに多くの研究により，身体的に魅力的な女性は魅力的でない女性よりも実際にデートの回数が多いのに対して，魅力的な男性は魅力的でない男性とデートの回数において差がないことが明らかにされている（Berscheid, Dion, Walster & Walster, 1971 ; Kressel & Adinolfi, 1975 ; Reis, Nezlek & Wheeler, 1980 ; Reis, Wheeler, Speigel, Kernis, Nezlek & Perri, 1982 ; Walster, 1965 ; Walster, Aronson, Abrahams & Rottman, 1966)。また，女性は男性に地位と資産を求め，男性は女性に身体的魅力を求め（Li, Bailey, Kenrick & Linsenmeier, 2002)，女性は男性について身体的特性より，知的特性に魅力を感じるのに対して，男性は女性について知的特性よりも身体的特性に魅力を感じると答えていることが明らかにされている（Feingold, 1990 ; Feingold, 1991 ; Feingold, 1992a ; Feingold, 1992b ; Feinglod & Mazzella, 1998 ; Sprecher, Aron, Hatfield, Coestese, Potapova & Levitskaya, 1994 ; Sprecher & Schwartz, 1994 ; Sprecher, Sullivan & Hatfield, 1994)。

このような従来の研究から，恋愛の成功の第一歩の大きな要因の一つに外見，容姿があげられることは明らかであるが，特に男性が恋人を求めるときは，大きな要因になることが示されているといえる。では，女性にとっては男性の身体的魅力は恋愛相手の決定に大きな要因にならないのであろうか。結婚を考えた場合，前述した研究からは，女性は男性の地位や資産や知的能力をより重視するとされているが，しかし，結婚を前提としない若

い青年の恋愛となると，身体的魅力が恋人選択により大きな影響を及ぼすと考えられる。あるいは，女性は男性と違い，身体的魅力を求めるとは言葉にしないが，実際には，男性同様に，あるいはそれ以上に，外見や容姿で恋人選択をしている可能性もある。ここに，内心と言葉による自己呈示の差異がみられるかも知れない。本研究はこの点を明確にするために，外見の帰属について，内心と言葉とを区分した2層心理測定法により実証的研究をすることを目的としている。女性が，言葉では，恋人選択に外見や容姿を重視するとは言わないが，実際には重視していることは，Walster et al.（1966）のコンピュータ・デート実験で強く示唆されている。

本論文では，前述したような従来の研究から，主として恋愛の成功・失敗の大きな要因となると考えられる身体的魅力（外見や容姿）について，内心と言葉による自己呈示の相違，その性差についてみていくことにする。帰属要因としては身体的魅力は，性格と同様，内的要因である。また，ファッションや化粧，ダイエットなどにより変えることは可能であるが，変動的というよりも，本人のもつ持続的で固定的要因と考えられる。このため，恋愛の成功・失敗の原因帰属においては，性格への原因帰属とほぼ同様の傾向がみられると考えられる。ただ，身体的魅力については，他者評価により敏感であるため（Swann, Bosson & Pelham, 2000），自他の恋愛の失敗の帰属において，複雑な心理が働き，より慎重な帰属傾向がみられるかもしれないと予想される。

仮説は齊藤他（2005）の結果を踏まえて，以下の通りである。

1. 恋愛の成功・失敗の原因帰属においては，より固定的要因への帰属が示され，内的要因において性格と共に外見への帰属傾向が示される。
2. 自己の恋愛の成功･失敗の原因帰属においては，内心よりも発言時は，より自己卑下的傾向が示される。特に外見にはその傾向が示される。
3. 親しい友人の原因帰属においては，他者高揚的傾向が示される。
   また，発言時はその傾向がより高く示される。特に外見にはその傾向が示される。
4. 嫌いな人の恋愛の成功･失敗の原因帰属においては，他者蔑視的傾向が示される。ただし，発言時はその傾向は抑制される。特に外見にはその傾向がみられる。
5. 恋愛の失敗の帰属においては，外見は発言の際は帰属に減少傾向が示される。
6. 恋愛の成功・失敗の帰属において性格と外見の帰属には性差が示され，男性の方が外見により多く，女性の方が性格により多く帰属する傾向が示される。この傾向は発言においてより強く示される。

方　法

対象者　首都圏の大学在籍の日本人大学生156名（男性78名，女性78名）。各項目の帰属率の分配合計が100%にならない回答用紙は誤答として分析から除外し，有効回答から，

男女で回答数が異なる分をランダムに選んで除外し，男女同数とした。

調査法　質問紙調査法を用いた。質問紙は次のような構成の独自の2層心理測定法を用いて調査表を作成した。

1）課題　恋愛

2）成否　恋愛の成功と失敗。

3）帰属対象者　自分自身，友人，嫌いな人の3者。

4）内心，発言　内心は自分の考え，発言は当人以外の人に話すときと当人に話すときを区別し，二通りの回答を求めた。ただし，対象が自分自身の場合の発言は，当人以外の人に話す場合のみである。

5）帰属要因　齊藤・荻野（1997），齊藤・遠藤・荻野（2000）に基づく帰属要因に外見・容姿の項目を加え，次の11項目とした。

a　素性，b　能力，c　外見・容姿，d　性格，e　出身校，f　努力，g　対応，h　課題，i　状況，j　運，k　運命

6）回答法　項目ごとの100%分割法。

7）質問　調査上の質問文の内容はおおよそ次のとおりである。自分の恋愛の成功と失敗について考えること，そして，その成功失敗の原因，理由が何であったか（何であるか）を考え，それをa～kの理由の中から選択すること，そのとき原因理由は1つでも2つでもそれ以上でもよいこと，各項目内のトータルがそれぞれ100%になるようにすること，たとえば，2つだったら70%と30%といったように重みづけをして，それを数値（%）で記入すること，そのとき，自分の内心での考えを自分の考え（内心）の欄に記入し，その出来事について人に話すときの原因理由を人に話すとき（発言）の欄に記入すること，内心と発言の欄の数値は同じでも違っていてもいいことなどを教示する。次に，友人と嫌いな人を1人ずつ選び，その2人の成功失敗の原因について自分自身のときと同様に自分の考えを内心欄に，その出来事について人に話すときの割合を発言欄に回答すること，そのとき，話す相手が当人の場合は当人，当人以外の人に話すときは，当人以外の人の欄にそれぞれの数値を記入することなどを教示した。

調査日時と手続き　2004年11月～12月に実施。大学の授業において，上記質問紙を配布し，回答させ，回収した。

結果と考察

恋愛の成功・失敗の原因についての各帰属要因への配分率の平均値は，内心・発言別，帰属対象者別，恋愛成否別に表1，表2，表3に示されている。以下，この結果をもとに上記の仮説を検討していく。統計的処理は外見を加えた今回の恋愛の場合，全体の帰属傾向を概観すると，c外見，d性格，g対応，j運の4要因に多く帰属していることが示され

たので，内的固定的要因としての外見と性格，内的変動的要因としての対応，外的変動的要因の運の4要因を取り上げることにした。統計的分析は，はじめに，内心と発言別に，自分自身，友人，嫌いな人が，恋愛に成功あるいは失敗した場合のそれぞれについて，帰属要因を被験者内変数，性別を被験者間因子とする4×2の分散分析をおこなった。この結果，どの場合においても帰属要因に0.1％水準で有意差があることが確かめられたので，4要因間の多重比較をBonferroniの用法を用いて行った。この分散分析の結果は取りまとめて，表4に示した。次に，各帰属要因別かつ対象別に，成功・失敗の2要因と内心・発言の2要因（または3要因）を被験者内変数とし，性別を被験者間因子とする2×2（または3）×2の分散分析を行った。この結果は，やはり取りまとめて表5に示した。以下，各仮説について，平均値と，統計的分析の結果を踏まえて，自分自身，友人，嫌いな人の順にみていく。4要因の性別の平均値は，帰属対象者別に表6，表7，表8に示されている。最後に性差の特徴および本研究でとり入れた当人以外の者への発言と当人への発言の比較検討を行うこととする。

1．自分の場合の帰属傾向

自分が恋愛に成功した場合は，表1に示されるように，内心ではその原因を性格（32.9%）に最も多く帰属する傾向が見られた。このように自分の成功においては，内的要因へ帰属する傾向が見られた。この帰属要因間の差は，多重比較（5％水準で検定）の結果，成功の場合には性格は他のどの帰属要因と比較しても高く，有意差が認められた。失敗の場合は，性格の比率が下がり外見の比率が上がって，両者の間に有意差は認められなかった。しかしこの2要因と他の2要因（対応，運）との間には有意差が見られた。また発言の場合にも，帰属要因間の多重比較の結果，性格への帰属の高さは，他のすべての帰属要因との間に有意差が認められた。このことから自分の成功の帰属においては仮説1の性格要因については支持されたといえよう。この傾向は自己奉仕バイアス理論からみて，欧米と同様に自己奉仕の方向にあり，自己高揚的帰属といえ，帰属理論に示される自尊的傾向と同じ傾向を示しているといえよう。このため，このケースにおいては，従前から指摘されているような日本人特有の自己卑下的帰属傾向が強く示されることはなく，むしろ性格においては自己高揚的であることが示唆されたといえる。さらに発言でも，原因を性格に最も多く帰属させる傾向（30.1%）が見られた。ここでも自己高揚的自己呈示が明示されている。

自分が成功した場合の内心での原因帰属で2番目に多いのは外見（15.0%）であり，3番目が運（10.9%）である。外見は内的固定的要因なので，上記の性格同様に自己高揚的といえる。ただし，検定の結果，性格のように他要因との差は明確には示されていない。さて，自分が成功した場合の発言では，原因帰属で2番目に多いのは運（16.1%）であり，3番目が外見であった。内心，発言いずれの場合も外見と運の間に有意差は認められなかっ

表1　自分の恋愛の成功と失敗における帰属傾向（%）

帰属要因	成功				失敗			
	内心		発言		内心		発言	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
a　素性	1.4	6.8	1.2	5.6	1.4	5.5	1.3	6.0
b　能力	4.3	8.5	3.9	8.9	4.3	10.1	3.0	8.1
c　外見	15.0	19.4	11.5	17.5	21.3	22.8	17.6	23.3
d　性格	32.9	22.9	30.1	26.8	27.7	26.2	25.9	26.5
e　卒校	0.9	4.6	0.7	4.7	0.7	4.6	0.7	4.3
f　努力	9.7	17.0	8.5	16.8	5.3	11.8	5.7	12.6
g　対応	8.3	12.0	9.7	15.6	14.9	18.8	14.6	20.4
h　相手	2.8	7.6	3.3	9.8	3.9	9.3	6.5	15.1
i　環境	4.5	9.1	5.0	11.5	6.4	13.7	6.3	13.7
j　運	10.9	18.7	16.1	24.1	9.2	18.1	10.6	19.6
k　運命	9.4	17.1	10.1	18.8	5.0	11.1	7.7	16.4

表2　友人の恋愛の成功と失敗における帰属傾向（%）

帰属要因	成功						失敗					
	内心		発言				内心		発言			
			当人外へ		当人へ				当人外へ		当人へ	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
a　素性	1.5	5.9	1.2	5.2	0.9	4.6	1.1	4.9	1.9	7.0	1.2	4.4
b　能力	5.7	11.7	5.6	12.4	6.1	12.3	3.5	9.5	3.5	9.5	2.4	6.2
c　外見	22.1	22.6	20.8	20.7	16.9	20.6	13.6	19.7	11.7	19.2	6.7	14.6
d　性格	32.0	22.6	33.5	25.4	36.1	27.7	26.3	26.0	26.0	26.1	23.2	27.0
e　卒校	1.0	4.8	0.9	5.3	0.9	5.2	0.4	3.3	0.1	0.8	0.2	1.8
f　努力	8.5	16.7	7.4	14.7	8.9	16.4	8.1	14.1	7.0	12.6	7.1	12.7
g　対応	8.3	12.0	9.4	13.6	10.6	17.6	15.2	20.7	14.2	20.1	15.0	21.5
h　相手	2.6	7.8	1.9	5.5	2.1	6.4	7.6	16.5	8.9	17.8	9.8	18.6
i　環境	7.3	12.8	6.7	11.8	5.4	11.8	7.6	14.0	6.6	12.2	8.3	14.8
j　運	5.9	10.3	6.8	13.7	4.7	11.0	9.4	17.0	12.8	22.7	16.7	25.7
k　運命	5.2	11.8	5.9	13.6	7.5	15.9	7.2	16.0	7.3	16.0	9.5	19.0

表3　嫌いな人の恋愛の成功と失敗における帰属傾向（%）

帰属要因	成功						失敗					
	内心		発言				内心		発言			
			当人外へ		当人へ				当人外へ		当人へ	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
a　素性	3.2	11.1	2.3	9.4	0.8	3.4	1.0	4.5	0.9	4.7	0.5	2.4
b　能力	6.2	12.6	6.6	14.1	7.6	15.5	4.1	12.0	4.4	12.3	3.1	10.0
c　外見	23.7	26.1	20.5	23.6	22.4	27.3	19.1	24.3	17.3	24.3	7.4	16.1
d　性格	14.5	21.3	17.1	24.3	22.4	27.4	48.9	33.0	45.4	33.4	21.7	28.3
e　卒校	0.2	1.2	0.3	3.3	0.1	1.1	0.8	5.3	0.5	4.2	0.6	3.6
f　努力	4.6	11.4	4.5	10.7	5.9	13.1	3.7	9.5	4.3	10.4	5.6	13.4
g　対応	8.4	16.7	8.8	16.4	10.3	18.9	7.1	11.4	7.3	12.1	9.8	16.3
h　相手	4.0	12.1	4.4	14.3	2.9	11.0	2.9	10.2	4.0	12.0	6.1	16.2
i　環境	5.0	13.0	6.6	17.7	5.1	14.1	2.6	7.6	3.0	8.7	7.8	17.4
j　運	24.1	31.5	24.4	33.1	13.4	25.1	4.8	12.2	8.0	19.8	25.1	32.1
k　運命	6.1	16.6	4.5	15.1	9.1	22.7	5.1	16.0	4.8	16.0	12.5	26.1

た。しかし，帰属要因別に行った分散分析では，表5に見られるように，運の場合，内心・発言に1%水準の有意差が認められ，表1に示したように，運は内心よりも発言のほうが高い。自分の成功を運のような外的要因に帰属させることは，自己奉仕バイアス理論からみて自己卑下的帰属である。さらに，運は表5に示すように，成功・失敗×内心・発言の交互作用に5%水準の有意差が認められている。この要因が失敗よりも成功時の発言のときにより高い傾向を示すということは，日本人特有といわれる自己卑下的傾向が発言時にあらわれていることであり，日本人の自己卑下は人間関係を考慮した自己呈示によるものであることが強く示唆される。

このように内心と発言での帰属傾向の違いは，性格，外見それぞれについて行った分散分析でも，性格では5%水準で，外見では0.1%水準で有意な差が認められ，発言よりも内心が高い。これに対して，先に述べたように，運は内心よりも発言で多いことが明示された。この場合，性格，外見は自己高揚的，運は自己卑下的であるので，比較すると，内心においては自己高揚的帰属が多くなされ，発言においては自己卑下的帰属が多くなされているということになる。この傾向は仮説2の前半部分を支持しているといえよう。性差については後に言及する。

次に自分が恋愛に失敗した場合，表1に示されるように，内心，発言ともその原因を性格（内心27.7%，発言25.9%）に最も多く帰属させ，次いで外見（内心21.3%，発言17.6%）に多く帰属させる傾向が見られた。性格と外見は，Weiner（1980）の分類に従えば，内的固定的要因である。このように自分の失敗を内的固定的要因に帰属させることは，成功の場合が自己高揚的であるのとは逆に自己卑下的帰属といえる。帰属要因間の分散分析の結果を踏まえて行った多重比較（5%水準）の結果は，性格，外見ともに運との間に有意な差が認められた。この結果は，日本人は失敗したときは自己卑下的な帰属傾向が高いという，従前からいわれている日本人の帰属傾向（鹿内，1978；北山・高木・松本，1995）を支持しているといえる。また内心の帰属が高いことから，単に印象操作のための自己呈示によるものではなく，内心も自己卑下的であることが示唆されている。ただし，齊藤他（2005）で指摘したように，従前の研究では，日本人は内的変動要因の努力への帰属が多いとされてきた。努力は同じ内的要因への帰属ではあっても性格とは，Weiner（1980）の帰属マトリックスの次元上は異なる。努力は変動要因であるのに対して，性格や外見は固定的要因である。本研究の恋愛における帰属では，齊藤他（2005）の結果同様に，日本人の特徴としてあげられている努力要因への帰属傾向は示されずに，課題による帰属傾向の違い，例えば恋愛と大学入試の違いが明らかにされているといえよう。努力要因への帰属は本研究では表1~表3に示されるようにきわめて少なく，今回，分散分析の対象から除外している。さて，内心と発言を比較してみると，成功においては仮説1，2は支持される方向にあり，前述した通り，内心は自己高揚的で，発言では内心に比べ，比較的自己卑下的である傾向が示されている。発言時において人間関係管理の自己呈示が働いて

いることをうかがわせる結果となっている。しかし，失敗したときには，内心，発言のいずれも，性格と外見に多く帰属していることは注目される。このように，失敗時に内心も含め内的固定的要因に帰属が集中するのは，心からの自己卑下的帰属と考えられ，このような場合においては，日本人の特徴といわれてきた自己批判的，自己卑下的傾向があることを支持する結果を示しているといえよう。

表4　対象別×内心・発言別×成功・失敗別に行った分散分析（帰属要因×性別）の結果
F値と有意確率p

対象	内心／発言	成功／失敗	帰属要因	帰属要因×性別	性別
自分自身	内心	成功	47.93 ***	3.22 *	0.88
		失敗	17.23 ***	2.08	0.36
	発言（他者へ）	成功	24.66 ***	5.00 **	1.19
		失敗	10.63 ***	2.70 *	1.71
友人	内心	成功	63.99 ***	3.67 *	0.63
		失敗	15.68 ***	2.27	0.85
	発言（他者へ）	成功	54.72 ***	2.94 *	0.27
		失敗	11.79 ***	1.38	1.90
	発言（当人へ）	成功	61.59 ***	4.21 **	0.66
		失敗	11.88 ***	3.20 *	5.51 *
嫌いな人	内心	成功	12.45 ***	2.69	4.16 *
		失敗	107.72 ***	0.80	4.21 *
	発言（他者へ）	成功	9.12 ***	1.58	1.95
		失敗	71.90 ***	0.18	6.90 **
	発言（当人へ）	成功	8.23 ***	3.21 *	2.22
		失敗	17.01 ***	0.63	5.11 *

*** $p<.001$　** $p<.01$　* $p<.05$

表5　対象別×帰属要因別に行った分散分析（成功／失敗×内心／発言×性別）の結果
F値と有意確率p

		成功失敗	成失×性別	内心発言	内発×性別	成失×内発	成失×内発×性別	性別
自分	外見	12.288 ***	0.003	12.911 ***	0.039	0.017	35.103	6.263 *
	性格	6.263 *	0.580	4.432 *	2.389	0.405	0.003	5.102 *
	対応	16.500 ***	0.102	0.460	2.312	1.446	1.160	1.784
	運	4.432 *	1.607	10.336 **	13.156 ***	4.925 *	0.997	1.372
友人	外見	32.345 ***	0.009	19.705 ***	1.773	0.385	0.292	3.873 *
	性格	14.772 ***	0.145	0.168	0.406	7.508 ***	0.262	5.659 *
	対応	15.240 ***	0.046	0.923	4.546 *	0.278	0.839	2.094
	運	21.466 ***	0.851	7.107 ***	2.563	13.716 ***	2.400	6.527 *
嫌いな人	外見	16.751 ***	0.234	14.455 ***	0.872	12.693 ***	2.114	1.536
	性格	88.623 ***	4.483 *	25.479 ***	0.647	60.432 ***	1.820	0.334
	対応	1.043	0.645	4.771 *	0.195	0.211	0.317	0.450
	運	19.655 ***	3.248	6.184 **	0.125	38.233 ***	0.139	5.541 *

*** $p<.001$　** $p<.01$　* $p<.05$

ところで，内的固定的要因である性格および外見への帰属が多くみられると述べたが，同じ内的固定的要因でも内心と発言の間を比較すると，性格と外見との間に差異がみられ

た。自分の恋愛の成功・失敗と内心・発言との関連から性格と外見をみると，成功した場合は，内心では性格により多く帰属し外見との間に有意な差が認められるが，失敗した場合は，内心での性格への帰属が減少し，外見への帰属が増大している。それでも性格の方が多いが，性格と外見との差が小さくなり，両者の間に有意な差が認められない。帰属要因別に行った分散分析の結果は，性格，外見ともに成功と失敗の間に性格は5%水準の，外見は0.1%水準の有意差が認められた。この結果は，性格と外見を個別にみると，性格は成功のときに失敗のときよりも多く帰属され，外見は失敗のときに成功のときよりも多く帰属されることを示している。外見は内的固定的要因なので，この傾向を単純に自己卑下的と言うことも出来るが，自分の失敗を自分の外見に帰属させることは単に自己卑下と言うよりも自己卑下をしながら，外見という自分ではどうにも出来ない要因に帰属させることにより自己を説得し，失敗を納得するという心理的合理化をしているとも解釈できる。外見への帰属は後のケースでも言及するが他の要因よりも複雑な心理を反映していると考えられ，ここでは，軽々に結論を出すべきではなく，後の研究の対象と言えよう。これは，仮説2の後半はさらなる検討が必要であることを意味していると考えたい。

2. 友人の原因帰属

友人が恋愛に成功した場合は，表2に示されるように，内心，発言ともにその原因を性格（内心32.0%，発言当人外へ33.5%，当人へ36.1%）に最も多く帰属させ，次いで外見（内心22.1%，発言当人外へ20.8%，当人へ16.9%）に多く帰属させる傾向が見られた。多重分析の結果，性格と外見の間に有意差があり，この2要因と運や対応との間にも差が認められた。これは，自分自身の場合と同様，仮説1を支持している。性格と外見は内的固定的要因であり，他者の成功を内的要因に帰属することは，他者高揚的帰属といえる。これは，友人を内集団の一員とみなすと，社会的アイデンティティ理論から予測される内集団ひいき性の表れと推察される。また，友人という内集団の一員を他者高揚することによりその集団に含まれる自分を高揚する傾向が示唆されているということも推察できよう。この結果は，仮説3の前半部分を支持している。齊藤他（2005）においては，性格への帰属は内心よりも発言のほうが多く，他者高揚的になっていた。そして今回も内心と発言間に同じ傾向がみられたが，有意な差は認められなかった。また，同じ内的固定的要因である外見への帰属は0.1%水準の有意差が認められた。しかし性格とは異なり外見は，内心より発言，特に当人に話すときに外見への帰属は減少している。成功におけるこの結果は仮説3の後半部分の外見に関する仮説を支持しない。当人に対して発言するときには，外見によって恋愛が成功したと言うことがむしろ抑制されている。これは，友人の外見への評価は，複雑であることをうかがわせる。この傾向は今後，十分に検討しなければならない課題であるが，一つには，当人に対して外見で恋愛に成功したということは，高揚的というよりも蔑視的と受け取られかねないと考えるのかもしれない。また一つには自

己評価維持モデルの比較メカニズムが働いているのではないかと推察される。

友人が恋愛に失敗した場合は，表2に示されるように，内心ではその原因を性格に最も多く帰属する傾向が見られ（26.3%），多重比較の結果，他の3要因との間に有意差が認められた。他者の失敗を性格という内的要因に帰属するこの傾向は他者蔑視的帰属といえ，性格に多く帰属させるという仮説1を支持するものではあるが，この結果は友人には他者高揚的帰属をするという仮説3を支持していないように思われる。しかし，成功のときと比較すると，失敗の場合の性格への帰属は，内心，当人以外，当人への発言いずれにおいても少ない。成功と失敗の間には，要因別に行った分散分析の結果は0.1%水準で有意な差がみられている。このことからは，成功のときに比べると失敗のときの方が友人に対しては他者高揚的であるともいえる。成功よりも失敗において帰属率が低いというこの点は外見についても同じことが言える。しかし外見は，性格の場合と異なり，先に述べたように内心と発言の間に有意な差が認められている。特に当人を目の前にしては，外見への帰属は大きく減少している。失敗した当人に対するこの傾向は，他者蔑視を強く抑制しているといえ，友人との人間関係維持の自己呈示ということを示唆している。

友人の場合の成功と失敗の帰属は，前述したように，成功では，内心も発言も1番多いのは性格であり，2番に多いのは外見である。多重比較の結果，内心，当人外への発言及び当人への発言のすべてにおいて，性格と他の要因（外見，対応，運）との間には有意差が認められた。しかし失敗では，成功時に比べて，性格，外見への帰属が減少し，対応，運への帰属が増加している。要因別に行った分散分析の結果は，4要因ともに成功失敗要因に差が認められ，性格，外見は失敗よりも成功の方が多く，対応，運は成功よりも失敗の方が多いことが示された。その結果失敗では，内心と当人外への発言の場合には，性格を除く3帰属要因間の差が減少し，3要因間に有意差が認められない。しかし，当人への発言においては，運への帰属が高まる一方，外見への帰属が更に減少し，対応と運への帰属が外見よりも有意に高いことが示された。内的変動要因である対応や外的変動要因である運への帰属の失敗時における増加と，特に当人への発言時における外見よりも多い帰属とは，他者の失敗を内的変動要因や外的変動要因に帰属することは他者高揚的であるといえるので，自己呈示からみると，友人の失敗に対しては他者蔑視の抑制と他者高揚的帰属がなされるといえる。このことから，友人当人を目の前にしたときは，仮説3の後半部分は支持されているといえよう。

3．嫌いな人の帰属傾向

嫌いな人が恋愛に成功した場合は，表3に示されるように，内心と当人外への発言はともに原因を運（内心24.1%，当人外へ24.4%）と外見（内心23.7%，当人へ22.4%）とに多く帰属する傾向が見られた。特に嫌いな人の場合は表5に見られるように，自分や友人に比べて内心と発言の違いが顕著であり，4つの帰属要因すべてに有意差が認められた。内

心と当人以外への発言で運への帰属が高いことは，自分や友人の成功の帰属には見られない傾向であり，仮説1とは異なり外的変動的要因がクローズアップされている。内心の場合と当人以外への発言の場合それぞれについて行った帰属要因間の多重比較の結果は，運は性格よりも帰属傾向が有意に高いことが示された。このように他者の成功を外的要因に帰属させることは他者蔑視的帰属であるといえる。しかし，当人への発言では，運への帰属（13.4%）が減少し性格への帰属（22.4%）が増大して帰属率が逆転している。しかも両者の間には有意差が認められた。内心は他者蔑視的傾向であるが，当人を前にしての発言時にはその傾向は抑制されることから，発言時の印象操作の自己呈示が働いていると推察される。話している相手の自分への評価を考慮に入れて，他者蔑視を抑制しているといえるかもしれない。

さらに次のような点が注目される。嫌いな人に対しては同じ内的で固定的要因でも性格と外見への帰属は異なった傾向を示していることである。嫌いな人が成功した場合，外見への帰属は内心では性格よりも多く，多重比較の結果両者の間に有意差が認められている。そして成功した場合，運は外見と同程度に帰属が多い。これもまた自分自身や友人では見られない傾向である。このことは，恋愛における成功の原因に言及するとき，外見が，複雑な要因であることを示唆しているといえる。外見が良いから成功したと考えるとき，あるいは言うとき，それは他者高揚的でもあるが，時にはその人の内面を無視するという点で，蔑視的ともいえる。外見への帰属はこの点，注意を要するといえよう。外見は当人以外への発言でも，内心のときと同じく，運同様に多く帰属されているが，当人に対したときは，運は内心や当人以外に比べ減少しているのに対して，外見は減少していない。この点にも外見の二面性が示唆されているといえよう。

嫌いな人が恋愛に失敗した場合は，成功したときとは異なり，内心と当人外への発言は性格への帰属（内心48.9%，当人外へ45.4%）が他のどれよりも多く，他の要因との間に有意差が見られた。2番目に多いのは外見である。恋愛に失敗したときの性格への帰属は他者蔑視的であるので，この結果は仮説4の前半部分を支持しているといえる。多重比較の結果では，性格と外見の間，さらに外見と他の帰属要因の間に有意差が認められた。しかし当人への発言になると成功とは逆に運への帰属（25.1%）が多くなり，性格（21.7%）や外見（7.4%）への帰属傾向は減少している。この違いは，表5の分散分析の表において，嫌いな人の帰属要因のうち，対応を除く3要因すべてに成功・失敗と内心・発言の交互作用に0.1%水準の高い有意差が見られることによっても裏付けられている。嫌いな人の場合でも，当人を目の前にした場合，蔑視的発言は抑制されることが示されている。すなわち，嫌いな人が恋愛に成功したときと同様に，当人に対して発言するときは蔑視的な内的要因への帰属が少なくなり，外的要因の運への帰属が多くなっている。他者の失敗をこのように外的要因に帰属することは他者高揚的であり，たとえ嫌いな人でも当人を目の前にしては，他者蔑視的帰属を抑制し他者高揚的自己呈示を行っていると考えら

れる。特に嫌いな人が失敗したときの性格，外見への帰属の減少，運への帰属の増大にこの傾向が顕著にみられている。嫌いな人に対しては，内心あるいは当人以外の人への発言の際にはきわめて他者蔑視的ではあるが，それに比較して当人に対しての発言においては他者蔑視的帰属が抑制されることを示している。そこには，嫌いな人に対しても良い人間関係を維持しようとする自己呈示的動機が働いていることが示唆されているといえよう。この結果は仮説4の後半部分を支持しているといえる。なお，この傾向は特に外見にみられると予測したが，性格についてもみられた。

4. 帰属傾向の性差

問題提起において詳述したように，恋愛については先行研究により性差があることが知られている。そこで次に，本研究の結果について特に性差に焦点を合わせてみていくことにする。表6，表7，表8は帰属対象別に，4帰属要因への男性と女性の帰属率を表したものである。

表6　自分の恋愛の成功と失敗における帰属傾向（性別平均%）

帰属要因	成功				失敗			
	内心		発言		内心		発言	
	男	女	男	女	男	女	男	女
c　外見	18.2	11.9	14.4	8.6	24.1	18.5	21.0	14.1
d　性格	29.4	36.5	24.7	35.4	25.7	29.7	22.1	29.7
g　対応	9.7	6.9	10.6	8.8	17.5	12.3	15.2	14.0
j　運	11.9	9.9	20.1	12.2	7.2	11.2	13.3	8.0

表7　友人の恋愛の成功と失敗における帰属傾向（性別平均%）

帰属要因	成功						失敗					
	内心		発言				内心		発言			
			当人外へ		当人へ				当人外へ		当人へ	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
c　外見	25.6	18.5	22.1	19.6	18.1	15.7	16.4	10.8	13.5	9.9	8.6	4.8
d　性格	28.5	35.5	29.7	37.3	31.5	40.7	22.9	29.8	23.7	28.4	19.7	26.7
g　対応	8.9	7.8	10.1	8.7	14.3	6.8	16.2	14.2	15.1	13.4	17.3	12.8
j　運	6.9	4.9	9.5	4.0	6.0	3.3	11.0	7.7	15.7	9.9	21.6	11.9

表8　嫌いな人の恋愛の成功と失敗における帰属傾向（性別平均%）

帰属要因	成功						失敗					
	内心		発言				内心		発言			
			当人外へ		当人へ				当人外へ		当人へ	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
c　外見	24.8	22.6	20.1	20.9	25.3	19.6	22.7	15.5	19.3	15.4	8.1	6.7
d　性格	11.2	17.9	15.6	18.7	17.8	27.0	48.6	49.2	46.3	44.5	25.5	17.9
g　対応	10.0	6.8	9.3	8.3	11.3	9.3	7.2	6.9	7.7	6.9	9.7	9.9
j　運	29.4	18.9	29.2	19.7	17.7	9.0	5.6	4.0	10.3	5.7	26.5	23.6

対象別×内心発言別×成功失敗別に行った分散分析の結果（表4）を見ると，全体としての性別による差は嫌いな人の失敗の場合に大きいことが読み取れる。しかし帰属要因との交互作用で見ていくと，自分自身や友人の場合に多く，全体としては6つの成功のケースと2つの失敗のケースにおいて，交互作用に1%水準ないしは5%水準で有意差が見られた。また，帰属要因別に行った分散分析の結果（表5）では6ケースに性別による有意差が見られた。はじめに，表6～8の帰属率に照らして，この6つのケースを検討すると，次の3つの点が浮かび上がってくる。自分自身および友人の場合，①性格への帰属は女性の方が男性よりも多く，②外見への帰属は男性の方が女性よりも多い。友人及び嫌いな人の場合に，③運への帰属が女性よりも男性の方が多い。

そこで，他者への発言，当人への発言について成功と失敗別に行った分散分析において帰属要因と性との交互作用に有意差が見られた8つのケースを個々に見ていくと，すべてが上記の3点と一致する。

自分自身についての性差についてみると，先行研究から，恋愛において男性は，女性より身体的魅力つまり本調査における外見をより重視し，女性は性格をより重視するとされると仮説したが，本調査結果も多くのケースにおいてその傾向を示しており，全体として，仮説6は支持されたといえよう。この傾向は，友人についても言うことができる。また，運については男性の方がより多く帰属させている。運は自己卑下的で，外的変動要因であることを考えると，この性差は日本で伝統的に言われているところの女性は自己呈示上，自己卑下的に発言するという傾向とは一致しない。この傾向は現在の男女の恋愛観の変化を示唆しているかもしれないと思われる。ただし，帰属率が低かったために統計的分析対象から除外したが，齊藤・遠藤・荻野（2000）から推測できることは，女性の場合，恋愛については運よりも運命に帰属する傾向が男性よりも強く，それがこの結果に影響を与えていると考えることもできる。

さらに，要因別に行った分散分析において，性別と他の要因との交互作用に有意差が見られたところは次の3つの場合のみである。1つは，成功・失敗と性別との交互作用が，嫌いな人の性格に見られる。これは，全体的に男女ともに嫌いな人が成功したときよりも失敗した場合に性格に帰属させる傾向があるが，女性では当人への発言の場合に男性よりも性格への帰属が低いことによる。表に記載していないが，女性では，失敗した嫌いな当人への発言の場合，運命への帰属の上昇が見られる。次の2つの交互作用はいずれも内心・発言と性別の交互作用であり，いずれも男性の特徴として現れている。一つは自分自身の運に見られ，男性は自分自身の場合，内心よりも発言において運に帰属する傾向が女性に比較して高いことである。二つめは友人の対応に見られる。男性は友人当人に話す場合には，内心や当人以外に話す場合よりも対応に帰属する傾向が女性よりも高いことを示している。

5. 発言する相手による差異

本研究は，恋愛の帰属要因に外見・容姿を加えたことと発言対象を当人以外へと当人への二つに区分したこと，この二つの点でこれまでの研究と異なる。自己呈示の研究アプローチとして，発言対象による内心と発言の相違に焦点をあてているが，発言の際，発言相手の相違により自己呈示の仕方は大きく変わることが予測できる。そこで，本研究では発言の際の発言相手を当人に発言するときと，当人以外に発言するときとを区別した。自分の恋愛の成功・失敗について話すときは，当事者は自分なので発言相手に当事者なるものはいないが，友人や嫌な人の恋愛の成功･失敗について話すときは，話す相手が当の友人あるいは当の嫌な人である場合とそれ以外の場合があり，それによって話すときの状況がかなり違うと考えられよう。本人の前ではいいにくいこと，本人の前では言うが他の人にはそんな話はしないことなど，日常的に考えても当人と当人以外に対するときの自己呈示の仕方は違うことが容易に想像できる。そこで，本研究の調査では，質問紙調査表において友人と嫌いな人の恋愛の成功・失敗の場合には，全項目において，発言相手が，当人の場合と当人以外の場合を区分して答えさせた。これにより，友人や嫌いな人への当人を前にしての自己呈示と当人がいない場合の呈示の比較をみることができる。ここでは，結果を踏まえて，あらためて，両者の比較を友人，嫌いな人の順に考察していくことにする。

まず，友人が恋愛に成功した場合についてみると，前述したように，性格と外見という内的固定的要因に多く帰属させている。このことは友人当人を前にして他者高揚的呈示がなされることを示している。その両者の発言時の帰属を比較すると，外見への帰属は，友人当人と話すときよりも，当人以外に友人のことを話すときに，より多く帰属されており，一方性格への帰属は，内心の場合と比較して，当人に発言するときにより多く帰属されていた。

さて，友人が恋愛に失敗した場合についてみると，当人への発言と当人以外への発言の比較において，性格，外見という内的固定的要因は，前述したように，当人に話すときは，当人以外の人に話すときよりも帰属させていない。外的要因である運へは，当人以外の人に話すときよりも，当人に話すときの方がより多く帰属させている。この結果，友人の恋愛の失敗の帰属傾向は，当人以外への発言よりも，当人に話をするときに，内的固定的要因を低め，外的変動的要因を高めるという傾向が明らかで，より他者高揚的であり，友人との人間関係を良好に維持しようとしているということができる。

次に，嫌いな人が恋愛に成功した場合についてみると，当人への発言と当人以外への発言を比較してみると，外見では両者にあまり差はなく，性格については，当人に対して，当人以外の人に対して話すときよりも多く帰属させている。また，運については逆に当人へよりも，当人以外の人に話すとき，より多く帰属させている。このことは，嫌いな人の成功について当人以外の人に話すときは，内的要因を抑え，外的要因をより多く呈示する

という蔑視的帰属傾向があることを示唆している。しかし，当人を前にすると逆の傾向がみられ，外的要因を抑え，内的要因により多く帰属させている。嫌いな人といえども，当の相手に対しては蔑視的発言はせず，嫌いな人とも，その場の人間関係を維持し，悪化させることを回避しようとする自己呈示がなされていることが示唆されているといえよう。

次に嫌いな人が恋愛に失敗した場合についてみると，ここでも主な帰属先は，性格，外見，運であるが，なかでも性格が群を抜いて多いことが明確にされた。ただし，当人への発言と当人以外の人への発言を比較してみると，性格と外見は，当人以外への発言に比べ，当人への発言のときは，帰属が大きく減少している。これに対して，運は，当人への発言のときは当人以外の人への発言に比べ，非常に多くなっている。当人への発言のみを比較すると，運への帰属が最も多くなっているのである。このように失敗を内的固定的要因よりも，外的変動的要因に帰属することは，他者高揚的帰属といえる。人は，嫌いな人の失敗要因を当人以外の人に話すときは，蔑視的帰属をするが，当人に話すときは，高揚的に帰属することが明らかになった。このことは，嫌いな人が失敗した場合も，当人を前にすると蔑視的発言はせず，嫌いな人とも，その場の人間関係を維持し，悪化させることを回避しようとする自己呈示をすることが示唆されているといえよう。

本論は，内心と発言の違いを自己呈示という視点から検証することを目的の一つとしているが，ここでは，発言する相手の違いによる自己呈示の方略の相違が明らかになった。自己呈示が自己高揚的動機と自己防衛的動機から生じていることは齊藤（2004，2005）で論述されているが，それは自分を取りまく人間関係を維持，あるいは高めようという人間関係的な動機をもとにしている。そこでは，友人や嫌いな人について実際の帰属を呈示するというよりも，その場の人間関係の中での自分の立場をよりよくするための自己呈示としての帰属呈示をすることになるのである。このため，話す相手との関係からその呈示方略も当然違ってくるのである。友人の失敗について友人に直接話す場合は，周りの人に対して話していたように友人蔑視を口にするのではなく，友人を高揚するような自己呈示を言葉にすることになるのである。また嫌いな人の恋愛の成功について話すときも，当人に話すときは，嫌いな人とこのような話しをする機会は少ないとは思うが，その成功は性格と外見という内的固定的要因に帰属され，より高揚的帰属を呈示することが示された。ただし内心では，性格よりも外見に多く帰属させていた。この傾向の解釈は注意を要すると思われる。外見は内的固定的帰属で一般的には他者高揚的であるとされるが，恋愛での嫌いな人の帰属の場合，そうともいいきれないことが示唆されていると考えられる点である。“顔が良いから成功した”という見方は，“性格がいいから成功した”とは異なり，考え方によっては人格を否定した蔑視的帰属ともとらえられよう。この傾向は嫌いな人が恋愛に失敗したときは特に明確に表れる。内心では失敗の原因を性格と外見に帰属させ，当人以外の人に話すときもそのように話し，きわめて他者蔑視的帰属を行っているが，当人に話すときは，性格や外見への言及を抑え，運が悪かったことに多く帰属させ，蔑視的発

言を避けているのである。これにより，自分はその人を蔑視するような人間ではなく，むしろ評価している人間であることを伝え，他者高揚的自己呈示をし，友好的な印象づけを行ない，それにより，その場の人間関係をよりよい方向に維持しようとする傾向が実証的に明らかにされたといえる。

引用文献

Beach, L. & Wertheimer, M. (1962). A free response approach to the study of personal cognition. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 62, 367-374.

Berscheid, E., Dion, K., Walster (Hatfield), E., & Walster,G.W. (1971). Physical attractiveness and dating choice : A test of the matching hypothesis. *Journal of Experimental Social Psychology*, 7, 173-189.

Cicerello, A., & Sheehan, E.P. (1995). Personal advertisements : A content analysis. *Journal of Social Behavior and Personality*, 10, 751-756.

Feingold, A. (1990). Gender differences in effects of physical attractiveness on romantic attraction : A comparison across five research paradigms. *Journal of Personality and Social Psychology*, 59, 981-993.

Feingold, A. (1991). Sex differences in the effects of similarity and physical attractiveness on opposite-sex attraction. *Basic and Applied Social Psychology*, 12, 357-367.

Feingold, A. (1992a). Gender differences in mate selection preferences ; A test of the parental investment model. *Psychological Bulletin*, 112, 125-139.

Feingold, A. (1992b). Good-looking people are not what we think. *Psychological Bulletin*, 111, 304-341.

Feingold, A., & Mazzella, R. (1998). Gender differences in body image are increasing. *Psychological Science*, 9, 190-195.

Fletcher, G. J. O., Tither, J. M., O'Loughlin, C., Friesen, M., & Overall, N. (2003). Warm and homely or cold and beautiful? Sex differences in trading off traits in mate selection. Paper presented to Social Psychology meeting, Los Angeles.

北山忍・高木浩人・松本寿弥 (1995). 成功と失敗の帰因：日本的自己の文化心理学　心理学評論，38，247-280.

Koestner, R., & Wheeler, L. (1988). Self-presentation in personal advertisements : The influence of implicit notions of attraction and role expectations. *Journal of Social and Personal Relationships*, 5, 149-160.

Kressel, D., & Adionolfi, A. A. (1975). Physical attractiveness, social relations, and personality style. *Journal of Personality and Social Psychology*, 31, 245-253.

Li, N. P., Bailey, J. M., Kenrick, D. T., & Linsenmeier, J. A. W. (2002). The necessities and luxuries of mate preferences : Testing the tradeoffs. *Journal of Personality and Social Psychology*, 82, 947-955.

Murstein, B. I. (1972). Physical attractiveness and marital choice. *Journal of Personality and Social Psychology, 22*, 8-12.

荻野七重・齊藤勇 (2004). 日本人の言葉による自己卑下的帰属と自己呈示の実証的研究 白梅学園短期大学紀要, 40, 31-48.

Rajecki, D. W., Bledsoe, S. B., & Rasmussen, J. L. (1991). Successful personal ads : Gender differences and similarities in offers, stipulations, and outcomes. *Basic and Applied Social Psychology*, 12, 457-469.

Reis, H. T., Nezlek, J., & Wheeler, L. (1980). Physical attractiveness in social interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, 38, 604-617.

Reis, H. T., Wheeler, L., Speigel, N., Kernis, M. H., Nezlek, J., & Perri, M. (1982). Physical attractiveness in social interaction : 2. Why does appearance affect social experience? *Journal of Personality and Social Psychology, 43*, 979-996.

齊藤勇 (2004). 言葉による自己呈示の対人心理学的アプローチ 立正大学心理学研究所紀要, 2, 15-40.

齊藤勇 (2005). 自己防衛的自己呈示の言語社会心理学的研究 立正大学心理学研究所紀要, 3, 55-75.

齋藤勇・遠藤みゆき・荻野七重 (2000). 大学生の現実的課題の成功・失敗の帰属傾向－大学入試・恋愛・就職の原因帰属－立正大学文学部研究紀要, 16, 1-22.

齋藤勇・荻野七重 (1997). 運と運命への帰属 日本応用心理学会第64回大会発表論文集, p53.

齊藤勇・荻野七重・小嶋正敏 (2005). 日本人の自己卑下的自己呈示についての恋愛における実証的研究 立正大学心理学部紀要, 3, 17-40.

鹿内啓子 (1978). 成功・失敗の帰因作用に及ぼすself-esteemの影響 実験社会心理学研究, 18, 35-46.

Sprecher, S., Aron, A., Hatfield, E., Coetese, A., Potapova, E., & Levitskaya, A. (1994). Love : American style, Russian style, and Japanese style. *Personal Relationships, 1*, 349-369.

Sprecher, S., & Schwartz, P., (1994). Equity and balance in the exchange of contributions in close relationships. In M. J. Lerner & G. Mikula (Eds.), *Entitlement and the affectional bond: Justice in close relationships* (pp. 11-42). New York : Plenum.

Sprecher, S., Sullivan, Q., & Hatfield, E. (1994). Mate selection preference: Gender differences examined in a national sample. *Journal of Personality and Social Psychology, 66*, 1074-1080.

Swann, W. B., Jr., Bosson, J. K., & Pelham, B. W. (2000). Different partners, different selves :

Strategic verification of circumscribed identities. *Personality & Social Psychology Bulletin, 28*, 1215-1228.

Walster (Hatfield), E. (1965). The effect of self-esteem on romantic liking. *Journal of Experimental Social Psychology*, 1, 184-197.

Walster (Hatfield), E., Aronson, V., Abrahams, D., & Rottman, L. (1966). Importance of physical attractiveness in dating behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 4, 508-516.

Weiner, B. (1980). A cognitive (attribution) -emotion-action model of motivated behavior : An analysis of judgments of help-giving. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 186-200.

おぎの　ななえ（心理学）
さいとう　いさむ（心理学）
こじま　まさとし（心理学）